

# 中等教育英語教員の専門意識に関する一考察

小嶋 英夫\*

## A Study on EFL Teachers' Professional Consciousness in Secondary Education

Hideo KOJIMA

**要旨** これからの英語教育においては、「教え中心」から「学び中心」への教育全体のパラダイム・シフトや新しい学力観などを踏まえて、指導理論と授業実践の再構築が図られなければならない。本研究では、英語教育改革が進展する中で、本年度の教員免許状更新講習（選択領域）に参加した中等教育英語教員の生の声に耳を傾け、現場の教育事情を理解し、彼らの専門意識について考察することが目的である。教員免許状更新講習では、言語教育の世界的な動向を踏まえて、新しい理論と実践を紹介し協議を重ねた。最後に「優れた言語教授の特徴」に関する30項目について、質問紙を用いて参加者一人ひとりの意識調査を行い、その調査データ、講習内容に関する意見・感想、担当講師の観察を総合的に分析した。結果として、個人差はあれども英語教育改革の担い手として前向きに精進しようとする姿勢を全体的に感じることができた。教師教育者として、今後とも現職教員の研修に継続的に関わり、探究的実践を通して教育関係者の相互理解と成長を促す必要がある。

**キーワード：**中等教育英語教員 優れた言語教授の特徴 専門意識 教師教育

### 1. はじめに

現在我が国では、教員養成コアカリキュラムや教員の資質向上に資する指標の開発とそれに基づく研修など、教職の専門性とは何かを問うと同時に、教師のあり方、子どもとの関わり、教師の生きがいなどを再考する動きが見られる。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教師と学習者が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場をつくり、学習者が主体的・対話的で深い学びができるように支援することが期待される。

英語教師についても、「教え中心」から「学び中心」へのパラダイム・シフトに基づいて自らの教育理念を再考し、次期学習指導要領で育成を

目指す資質・能力の三つの柱を統合したアクティブ・ラーニング型の授業を実践・研究できる専門職能が問われている。我が国では、英語の知識・スキルにこだわったコミュニケーション能力の育成を、長らく英語教育の目標に掲げてきたが、世界的な視点から見れば、異文化間の相互理解能力、グローバル社会を生きる市民性の育成など、言語教育の目的がすでにシフトしてきている。

本研究者は、教員免許状更新講習が日本で始まった当初から、毎年主に中等教育英語教員を対象にした講習を行い、彼らの専門的資質・能力と実践的指導力の向上を支援してきた。本年度の講習では、「英語教育における新しい理論と実践」をテーマに掲げて、現職英語教員たちが英語教育改革をポジティブに受け止め専門的成長を遂げることができるように、理論と実践の両面から支援

\* こじま ひでお 文教大学教育学部学校教育課程英語専修

することを試みた。本研究では、受講者たちの「優れた言語教授の特徴」に対する自己評価、講習で取り上げた新しい理論と実践に対する彼らの意見・感想、指導講師の観察を総合的に分析・考察することによって、今後の教員免許状更新講習のあり方を探ることをねらいとする。

## 2. 方法

### (1) 参加者

2017年度に本研究が講師を務めた免許状更新講習選択領域の「英語教育における新しい理論と実践」を受講した計27名の現職英語教員（中学校教員23名、高等学校教員4名）を研究対象とする。ただし、中学校臨時採用教員7名を含む。

### (2) 手続き

本研究が講師となり2017年7月に実施した免許状更新講習では、最初に日本の新しい学力観に影響を与えた背景として、21世紀を生きる人々に求められる汎用的な資質・能力を定義づけ、それを基礎にカリキュラムを開発する世界の潮流を紹介し確認した。OECD Definition & Selection of Competencies Project (2002), Assessment & Teaching of 21<sup>st</sup> Century Skills Project (2012), 複言語・複文化主義, ヨーロッパ言語共通参照枠, ヨーロッパ言語ポートフォリオ, フィンランドの英語教育, 言語・内容統合型学習 (CLIL), 学習者オートノミー, 学習ストラテジー, 協働学習, 教師のオートノミーと新しい役割などについて、初めて具体的な説明を受けた受講者がほとんどであった。また、グループあるいは全体討議を通して、受講者は学校での日々の英語授業を振り返り、英語教育改革の動向とからめて様々な問題・課題について話し合った。

講習の終わり頃に、Good Language-Teaching Characteristics (Brown, 2007: 491) に基づく30項目の「優れた言語教授の特徴」について、講師側で解説を加えながら受講者一人ひとりに自己評価をしてもらった。お互いの傾向について意見交

換をした後に、講習最後の評価課題として、新しい学力観を踏まえ、これからの英語教育における新しい理論と実践について自分自身の考えを論じるように指示した。

## 3. 結果と分析

### 〈優れた言語教授の特徴に関する自己評価〉

受講者たちは、以下のA：専門的知識, B：教育学的スキル, C：対人関係スキル, D：個人的特性の4領域における計30項目について、5-strongly agree, 4-agree, 3-neutral, 2-disagree, 1-strongly disagreeの5段階で自己評価を行った。

#### Good Language-Teaching Characteristics

##### A: Technical Knowledge

1. Understands the linguistic systems of English phonology, grammar, and discourse.
2. Comprehensively grasps basic principles of language learning and teaching.
3. Has fluent competence in speaking writing, listening to, and reading English.
4. Knows through experience what is like to learn a foreign language.
5. Understands the close connection between language and culture.
6. Keeps up with the field through regular reading and conference/workshop attendance.

##### B: Pedagogical Skills

7. Has a well-thought-out, informed approach to language teaching.
8. Understands and uses a wide variety of techniques.
9. Efficiently designs and executes lesson plans.
10. Monitors lessons as they unfold and makes effective mid-lesson alterations.
11. Effectively perceives students' linguistic needs.
12. Gives optimal feedback to students.
13. Stimulates interaction, cooperation, and teamwork in the classroom.
14. Uses appropriate principles of classroom management.
15. Uses effective, clear presentation skills.
16. Creatively adapts textbook material and other audio, visual, and mechanical aids.
17. Innovatively creates brand-new materials when needed.
18. Uses interactive, intrinsically motivating techniques to create effective tests.

C: Interpersonal Skills						
19.	Is aware of cross-cultural differences and is sensitive to students' cultural traditions.					
20.	Enjoys people; shows enthusiasm, warmth, rapport, and appropriate humor.					
21.	Values the opinions and abilities of students.					
22.	Is patient in working with students of lesser ability.					
23.	Offers challenges to students of exceptionally high ability.					
24.	Cooperates harmoniously and candidly with colleagues (fellow teachers).					
25.	Seeks opportunities to share thoughts, ideas, and techniques with colleagues.					

D: Personal Qualities						
26.	Is well organized, conscientious in meeting commitments, and dependable.					
27.	Is flexible when things go awry.					
28.	Maintains an inquisitive mind in trying out new ways of teaching.					
29.	Sets short-term and long-term goals for continued professional growth.					
30.	Maintains and exemplifies high ethical and moral standards.					

上記の各項目に関して、5段階のそれぞれに相当する人数及び平均点は、次の通りである。

A: Technical Knowledge						
	5	4	3	2	1	M
1.	1	13	11	2	0	3.5
2.	1	12	14	0	0	3.5
3.	1	6	13	7	0	3.0
4.	6	14	6	1	0	3.9
5.	5	9	11	2	0	3.6
6.	1	4	9	10	3	2.6

B: Pedagogical Skills						
	5	4	3	2	1	M
7.	2	4	16	4	1	3.1
8.	2	8	12	4	1	3.2
9.	3	11	9	3	1	3.4
10.	1	8	12	5	1	3.1
11.	1	9	14	3	0	3.3
12.	1	14	9	3	0	3.5
13.	6	12	7	1	1	3.8
14.	3	13	8	3	0	3.6
15.	3	8	14	2	0	3.6
16.	4	9	9	5	0	3.4
17.	4	8	13	2	0	3.5
18.	1	6	16	3	1	3.1

C: Interpersonal Skills						
	5	4	3	2	1	M
19.	2	11	14	0	0	3.6
20.	5	15	7	0	0	3.9
21.	5	13	9	0	0	3.9
22.	7	16	4	0	0	4.1
23.	4	16	7	0	0	3.9
24.	7	12	7	0	1	3.9
25.	7	9	10	1	0	3.8

D: Personal Qualities						
	5	4	3	2	1	M
26.	2	12	12	1	0	3.6
27.	1	11	13	2	0	3.4
28.	3	12	11	1	0	3.6
29.	5	9	9	4	0	3.6
30.	3	12	10	2	0	3.6

Note. N=27 M=Mean  
5-strongly agree, 4-agree, 3-neutral, 2-disagree, 1-strongly disagree

4領域の全体的な傾向として、M=2.6～4.1（総合平均M=3.5）で、際だって高い項目は見られなかった。比較的M=4.0に近いものが多かったのは、対人関係スキルの領域で、本研究者が異なる日本人英語教員を対象に行った同種の研究（小嶋，2006，2012）と同じ結果であった。一方、項目6（読書や学会・ワークショップに参加したりして、英語教育の時流についていけるように心がけている）が、とりわけ低めのM=2.6である。臨時採用教員7名を含む本調査対象者の特徴の一つとも思われるが、実はこれも以前の調査と同傾向と言える。

以下において、A～Dの領域毎に分析し、より詳しく論じることとする。

#### A：専門的知識

専門的知識に関する項目1～6については、M=2.6～3.9（全体平均M=3.4）で差が広がった。項目3（聞く・話す・読む・書くといった4技能に優れた能力を持っている）は、今日の日本の英語教育で学習者側に期待される能力であるが、M=3.0からすると、教師側にも自信の欠如が認められる。項目6（M=2.6）については、近年学び

続ける教師像が強調され、自律的に専門的成長を遂げることを求められながら、実際は学びの機会に恵まれず、多忙を極める多くの日本人教師が悩んでいることに通じるであろう。特に教育改革の目玉とされる英語教育の新しい流れにうまく対応できず、悲観的な心境を吐露する受講者が多かった。

### B：教育学的スキル

教育学的スキルには項目7～18の計12項目が含まれ、4領域の中で最も項目数が多い。一方、 $M=3.1\sim 3.8$ （全体平均 $M=3.4$ ）で最も低めである。中でも、項目7（言語教授に対して情報豊かな考え抜かれたアプローチを持っている）、項目10（授業展開をモニターし、途中で効果的な変更を施す）、項目18（効果的なテストを作成するために、相互作用的で内発的に動機づけるテクニックを用いる）の3項目がともに $M=3.1$ で最も低かった。対照的に項目13（教室でインターアクション、協働、チームワークを促す）は $M=3.8$ で、日本人教師が一般に得意とするスキルと思われる。英語能力の高い教師であっても、本領域に含まれるスキルを欠いていることは珍しくない。これからの英語教師は、英語の知識・スキルのみならず、それらを活用して思考・判断・表現し、さらには社会で生きる力となる自律性・協働性・人間性を育む立場になるとすれば、教育学的スキルの向上が大いに期待される。

### C：対人関係スキル

対人関係スキルに含まれる項目19～25に関しては、 $M=3.6\sim 4.1$ （全体平均 $M=3.9$ ）で、4領域の中で最も高く、対象者の異なるこれまでの調査と同様の傾向を示した。一般に様々な集団の中で協調性・協働性を重んじる日本人の社会的特性が、現場教育のコンテキストにも認められる。社会的構成主義に基づく教育観は、今日世界的な主流と思われ、日本の文部科学省が授業での応用を推奨するアクティブ・ラーニングでも、協働学習

の理論が生かされている。学習者間、学習者と教師間、教師間などの協働の成果が期待される。項目22（能力的に低めの生徒にも忍耐強く対応する）は $M=4.1$ で、本研究対象者の回答中最も高い数値となっている。学習者の個人差に対して積極的に応じる姿勢は望ましいが、主体的な学習意欲の向上に結びついているか否かが気になる点である。

### D：個人的特性

教師自身の個人的特性に関する項目26～30は、全体平均が $M=3.6$ で、項目27（事態が予定通りにいかなくても柔軟に対応する）だけが $M=3.4$ 、その他の項目は全て $M=3.6$ であった。専門的知識や教育学的スキルよりは幾分高めとなっている。現在、学習者の主体的・対話的で深い学びが問い沙汰されているが、それを支援する立場である教師の特性がより重要になってくる。すなわち、項目28（新しい教授法に対する探求的精神を維持する）や項目29（専門的成長を継続するために短期・長期のゴールを設定する）を特性として持ち合わせているか否かが問われることになる。

この度免許状更新講習に参加した27名については、主に埼玉県内に勤務する小集団で臨時採用教員7名を含むなど、これまで調査対象になった講習参加グループとは出身エリアなど異なる点がいくつかある。しかしながら、自己評価の分析結果からすれば、内容的にはむしろ類似傾向が認められた。こうした量的データの結果を掘り下げて内実を理解するために、参加者自身の語りと本研究者による観察に基づき、さらに考察を深めていくことにする。

### 〈講習内容に関する受講者の語り〉

講習終了後に受講者から寄せられた講習内容に関する意見・感想を以下に紹介する。

- 最近教育現場でもよく話題になるアクティ

- ブ・ラーニングは、自分にとって課題であるとともに疑問に思っていることでもあったので、講習で取り上げていただき大変勉強になった。学力観が変化する中で、自ら新しい理論や実践を日々追及していくことの重要性を改めて感じた。
- 講習を通して他の受講生の方々から有意義な話を伺うことができ、アクティブ・ラーニングを進めていく上での現場の問題・悩みを共有することができた。自律学習、CLILを実践する際の課題、複言語主義、ヨーロッパ言語共通参照枠などの文脈化について、大いに考えさせられた。
  - これまで考えたことがない学習者オートノミー、教師オートノミーに関する話が今一番私の中に残っている。理論をしっかり学び、実践につなげようと思っている。これまで少し聞いたことがあったCLILについて、実践方法を検討していきたい。
  - 今までの知識中心・教師中心の授業を見つめ直し、何が足りておらず今後何が必要なのかを考える機会になった。協働学習が世界的に関心を寄せられているが、日本でのグループ・ワークと異なる理論に基づくことなど、英語教育の発展につながる新しいアイデアが得られた。
  - 授業改善をしたいとは思いつつも、アクティブ・ラーニングなどについて具体的によく分からない状態だったので、“一筋の光”が見えた気がした。授業改善の視点を示唆していただきとても勉強になった。ただし、理想的な授業をするためには色々考えなければならないものが多くあり、今、頭の中がパンク状態である。
  - 新学習指導要領の全面実施に向けて、新しい英語教育の理論や実践について学んだ。特に、学力の三つの要素を日々の英語授業で統合的に指導する方法は、ぜひとも今後授業実践に活かしたいと考えている。
  - 多様な教育的アプローチを教えていただいたが、英語を通してどういう子どもを育てたいのかをまず考えていかなければならない。言語を用いて自分の考えを表現させる力を授業の中でどう育成していけばよいのか、これは自分の課題である。中学校でポートフォリオを取り入れた形成的評価を考えたい。
  - 少し私には難しい内容だったが、英語に限らず、教師としてさらには人間としてどうあるべきかを大いに考えさせられた。そういう意味でも、大変有意義だったと思う。普段は与えられたことをこなすのに必死で、つい追われてしまう感じになりがちだけれど、無意識ながら実践していることもあったということに気づいた。まだまだ改善の余地がたくさんあるので、休み中じっくり考えて来学期からの授業に少しでも役立てたいと思う。
  - 今後の英語教育について、発想の転換が必要であること、ただ英語だけを教えるのではなく、知識・スキルを活用できる力を育て、異文化を理解できる能力を育てることが必要だと分かった。従来のやり方では駄目であり、グループ内での相互依存、自己・グループ責任、グループの改善手続きなどを通して、人間関係づくりや成長を促すことが大切である。
  - 長い間悩んでいたもの、かたまっていたものからようやく解放されたような気分である。今後は新しい視野を持って見つめていけそうだ。学び続ける教師、成長し続ける教師を目指していきたい。
  - 自分個人の印象としては、「聞く・話す・読む・書く」の四技能について、ようやく現場で本格的に指導されてきていると考えていたが、さらに先に行く英語学習及びその指導法を実現させていかなければならないという思いが生じてきている。いずれにしても、日本における今後の英語教育の方向性や考え方は正しいと思う。様々な困難が想定されるがよ

い方向に向かっていると実感しながら日々の業務に取り組むことは嬉しいことだ。生徒以上に教師が変わらなければならないが、今回講習で学んだことを活かしていくことができるように、自分自身を絶えず成長させていきたい。

- 今年の3月、本校は埼玉県内で最初のIB教育認定校になった。よって、評価システムや様々な面で他校より恵まれているし、今まで苦勞してやってきて作り上げたものは間違っていない、と今回の講習を受けて確認できた。本日の講習でお話いただいたことのほとんどをIBでやることができそうだ。自ら教師教育に携わりたくて、大学院で学ぶことを考えている。「自律した学習者」にもう一度なろうと思う。
- 英語をただ単に教えるだけでなく、また単なる理論だけでなく、総合的に言語教育を行うことの大切さを学んだ。自分の哲学をしっかり持つことが必要だと改めて感じた。CLILなど実践してみたいと思った。理解不十分ではあるが、とても意味深い理論をたくさん学べたと思う。

講習の最初の段階で、参加者の同意に基づき4人を基本とする小グループに分け、自己紹介を兼ねてお互いに職場の教育事情について語り合う場面を設定した。その後グループ代表が話し合いの内容を発表し、全体で教育現場の実態や講習に参加した動機や意義について相互理解を図った。その際に参加者の発言内容から推察されることは、文部科学省主導の教育改革、とりわけ英語教育改革に対して疑問を抱き、その方針と現場教育との間に大きなギャップがあると感じている者が多いことである。

これまでの英語教育は、英語の知識・技能の向上に主力を注ぎ、特に最近では技能統合型のコミュニケーション能力の育成を目標に据えてきた。これには、いわゆる技能教科の一つとして英語の重

要性を強調し、グローバル時代を生きる人として身につけるべきは英語運用能力であると説き、各種検定試験によるレベル判定を推奨することも含まれる。

講習受講者の反応からすれば、日本の教育改革のあいまいさ、欧米諸国との異質性が、現職英語教員に先行き不透明な不安感をもたらしているようだ。21世紀を生きる人々に期待する資質・能力として、「相互作用的に道具を用いる」、「異質な集団で交流する」、「自律的に活動する」を唱えるOECDのDeSeCoプロジェクト(2002)に影響を受け、日本の文部科学省は、これから日本の教育で育むべき資質・能力の三つの柱を定めた。これによって、知識・技能のみならず汎用的能力、主体性・協働性・人間性などが重要な要素として浮上してきている。しかしながら、現職英語教員がこれまでの教授法から脱け出せず、指導者としての自己変革が思うようにいかない現状が存在する。

現職教員が英語教育改革を推進できるように、研修の機会をどのように手当てするかも課題である。この度の免許状更新講習参加者の多くは、思うように研修の機会を得られず、時代の流れに対応できないもどかしさを感じている者が多かった。教師の指導力向上と新学習指導要領の周知・徹底を図るために、文部科学省は「英語教育推進リーダー中央研修」を行っている。これには、全国の各都道府県・政令指定都市教育委員会から、「地域の英語教育推進の中心的役割を果たす優秀な者」として推薦された教員たちが対象となる。彼らは1年間にわたる中央研修を受講し、その後1年間で12～14時間程度の研修の講師を務め、適切な内容の研修を行い、英語教育推進リーダーとして認められる。中央研修で学んだことをそのまま伝えるのではなく、自身の授業実践経験を踏まえて、一度咀嚼したうえで、自分の言葉として伝えることが期待される。本研究者はこれまで多くの指導主事と会い、現職教員研修のアドバイザーを務めてきた。中には文部科学省から教わっ

た内容をそのまま伝えることこそが安全策と考える者も見られる。現職教員が時代を先読みし、日本の英語教育を変革するような理論を個人的に学び、しかも実践と統合させて伝えることができるようになるには、教育への気高い精神性に加え、自己研修を継続する実質的な努力が求められる。

この度の講習内容は、一日で理解するには極めて難しい事項を多く含んでいたが、新しい理論と実践を学び入れ自己成長につなげることを希望する参加者が多かったことは幸いであった。特に、学習者オートノミーと教師オートノミーの定義づけ、学習者オートノミーを育む教師の新しい役割が印象深く受け止められたようで、最終試験の中に自分なりの解釈を記した者が目についた。これと関連するが、自律性（主体性）を高める授業へのアプローチとしてアクティブ・ラーニングを認識し直すこと、また内容と言語を統合した言語学習として世界的に注目されているCLILを、日本の英語授業で応用する可能性を探ることが、受講者自身の課題として語られることが多かった。

上記に加えて、複言語主義・複文化主義を柱とする外国語教育のための「ヨーロッパ言語共通参照枠」や学習者オートノミーを育成するツールとしての「ヨーロッパ言語ポートフォリオ」にも関心が集まった。文部科学省が今日奨励している授業へのアプローチの多くは、欧米において数十年前から実践されていることが講習で明らかにされると、日本の英語教育を含む教育全体の柱となる理念あるいは教育哲学の欠如を残念がる者が少なくなかった。この点については、欧米の大学での学びを長年継続し、言語政策や言語教育哲学の違いなどを痛感する本研究者としても同感である。

発展的実践事例の一つとして、国際バカロレア（IB）プログラムを認定校として実践している者がいた。この教師は昨年度も本研究者の更新講習に参加しており、今回が二度目の顔合わせとなった。文部科学省は2020年までにIB教育を提供する高等学校を200校に拡大する目標を掲げているが、埼玉県内ではあまり実践校例を耳にしない。

IBとは何か、一般の受講者はよくわからないので、実践者からの発言は全体にとって貴重な情報と見なされた。学習指導要領とIBプログラムの相違点として、前者の場合、「分析する・評価する・創造する」といった高次の思考の育成に関する記載はないが、後者には具体的なプロセスについて言及がされている。また、前者には評価に関する記載はないが、後者は到達目標が評価活動とともに明示され、評価指標・手法についても具体的に記載されている。さらに後者は、「知の理論」に基づいて体系的な指導が行われることが特徴とされる。このような点は、講習参加者にとって大変気になる新情報となった。教育事情の異なる現場から来た者同士が、互恵的に学びを深めたと思われる場面であった。

#### 4. おわりに

本研究では、2017年度の教員免許状更新講習の受講者を調査対象として、「優れた言語教授の特徴」に対する自己評価、講習内容に関する意見・感想、さらに指導講師側の観察をデータとして、中等教育英語教員の専門意識について総合的に分析・考察してきた。受講者の自己評価結果は、本研究者が前勤務先の大学で実施した先行研究と類似した傾向が認められた。中でも「対人関係スキル」に高評価が目立つのは、日本人教師の共通点かと思われる。日本の集団社会では、他者への思いやり、協調性が尊重される傾向にあるが、学校教育においてもしかりである。ただし、「協働」から「自律」へと向かう考え方は、個人重視型の欧米では自然であっても、日本の教育界ではすんなりとは理解され難い。よって、学習者オートノミー、教師オートノミーの育成を、教育全体の目標に掲げるには、まだまだ時間がかかりそうだ。

本研究の対象者には、20～30代の比較的若い教師が多く含まれており、それが新しい理論や実践への関心度を高め、挑戦意欲を感じさせた原因かもしれない。たったの一日で理解するのはほぼ不可能と思われる重要なコンセプトを次々と提示

されながら、集中力を失わず吸収しようとする心的態度は、講師にとって有り難く感じられた。海外では教職の高度化が進み、大学院教育でより高い専門性を身につける者が一般的に増えてきていると言われる。受講者の中に教師教育への関心が高まり、大学院進学を検討中の者がいたことは、本研究者の自己体験からしても歓迎すべきことと思う。

日本の教育改革は、「学び中心」へのパラダイム・シフトを唱えているが、現場の教育事情は千差万別で、文部科学省の期待通りにはいかないと感じられる。学習者が学びの主体とされると同時に、学習者と教師の互恵的成長、学び続ける教師像が強調されていることは、とても大事な意味がある。教師・学習者・教師教育者を含む教育関係者間の相互理解を図ること、また互恵的相互依存を通して成長を促進することが一層配慮されなければならない。教育改革期における免許状更新講習が果たす役割と意義について、改めて検討する必要があると考える。

#### 引用・参考文献

- Binkley, M., Erstad, O., Hermna, J., Raizen, S., Ripley, M., Miller-Ricci, M., & Rumble, M. (2012). Defining Twenty-First Century In. P. Griffin, E. Care, & B. McGaw (Eds.), *Assessment and Teaching of 21<sup>st</sup> Century Skills* (pp.17-66). Dordrecht: Springer.
- Brown, H. D. (2007). *Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy*. New York: Longman.
- Organization for Economic Co-operation and Development (2002). *Definition and Selection To Competencies (DeSeCo) : Theoretical and Conceptual Foundations: Strategy Paper*. Retrieved from <http://www.voced.edu.au/content/ngv%3A9408>
- Kojima, H. (2012). Professional Consciousness-Raising in EFL Teacher Education: Good

Language-Teaching Characteristics, Plurilingualism, and Autonomy. *TOHOKU TEFL*, 4, 1-12.

- 小嶋英夫 (2006). 中等教育英語教員集中研修における専門職能開発 弘前大学教員養成学センター紀要『教員養成学研究』第2号, 25-34.